

論文審査の結果の要旨

氏名 遠藤 星希

唐代の詩人李賀は、中国詩歌史上随一の幻想豊かな詩人として知られる。本論は、李賀の作品を、主としてその時間意識に着目して分析し、その特質を論じたものである。中国詩歌研究の伝統は、作者の生涯をもとに作品を理解するのを基本とする。李賀の場合、基礎となるのは、作者が27歳で夭折し、生涯不遇であったという事実である。近代的手法を李賀詩の研究に初めて応用した錢鍾書は、その詩が無窮ともいえる長大な時間にしばしば言及することを指摘し、そこには、時間は速やかに過ぎ去り、人生は有限であることの悲しみが吐露されていると解釈した。この説は多くの研究者から支持され、後の李賀研究の礎を築くものとなった。これに対し遠藤氏は、作者の生涯から切り離し、テキストそのものに対峙するならば、まったく異なる様相が見えて来ると主張する。神仙という不死の存在は、有限の生を克服するために生み出されたものであり、古来憧憬と羨望の対象として文芸作品に描かれてきた。ところが李賀の詩に描かれる神女は、永遠の生を生きながら、少しも幸せそうではない。彼女らは、恋人を求めて死後も彷徨を続ける幽鬼と同様、自分の生を我が手につかむことのできない不如意な存在であり、「時間の囚われ人」として描かれているというのである。李賀詩に関して、このような指摘がなされたことはかつてなく、作品を丁寧に分析しつつ進められる論述は、説得力に富んでいる。

遠藤氏は次に、李賀の描く無窮の時間には、二種類の異なるものがあると指摘する。一つは事物にほとんど変化を与えぬまま、流れ続ける時間であり、もう一つは、海は干上がり、山は風に吹かれて平らになり、神仙すら幾度も死ぬという、巨大な変化をもたらす時間である。しかし後者も長大なスパンを経て元の所に回帰するという点では、本質的には前者と変わるところがないと説く。

このように時間を救いのない牢獄ととらえる李賀の詩には、時間からの脱出の夢が描かれる。沈む太陽を押しとどめ、幸せな時間を永続させたいという願いは、中国の詩歌にしばしば見られるものであり、李賀の詩にも、時間停止の願望を詠うものはある。しかし太陽を運んで空をめぐる龍の脚を斬り、その肉を「嚙」みたいと願い、太陽が玻璃のように砕け散る様を描くことは李賀以外の詩人にはない。遠藤氏はここに時間の象徴である太陽を破壊し、時間のない状態を実現したいという李賀の願いが表明されているとする。

本論は、個々の詩の解釈についてはなお安定を欠く箇所があり、李賀の時間意識に対する文学史的考察にやや不足する点があるものの、捉われない眼でテキストに向き合い、その詩人としての核心部に迫り、特異な詩句表現のよって来たる所を初めて明らかにしたという点で、その意義はきわめて大きい。よって本審査委員会は本論文が博士(文学)の学位に値するものと判断する。